いわゆる“反訓”について

Characters having contradictory meanings in Classical Chinese

樋　口　　靖

1．周知のように，文献学（philology）と言語学（linguistics）とには区別がある。文献学は文字，書面言語の研究を含む文献記録の考証と解説にその重点があり，言語学の研究対象は，言語それ自体である。まさにソシュールの≪講義≫の最後に置かれている言葉，「言語学の独自且つ真正の対象は，それ自体としての言語であり，それ自体のための言語である」とは，文献学からの言語学の独立を再確認するための宣言として，まことに印象深いものがある。

ところで，中国の伝統的学問のうちには，言語それ自体を研究対象としてとりあげようとする意識は，一般に非常に乏しかった。中国の学問の目的が，古代の聖賢の思想を明らかにし，その理解会得をめざすことにあった以上，そして，それは言語を通じてしか行ない得ないものである以上，言葉の研究がその大目的のための手段としての地位に甘んずるよりほかなかったのは，至極当然のことである。しかもその言葉とは，書きのこされた文字，すなわち漢字による書面言語としての中国古典語を専ら意味していることも，当然のこととして首肯できよう。この書面言語を研究対象とした学問領域こそが，伝統的用語で，「小学」と呼ばれているところのものである。

≪四庫全書提要≫に拠れば，小学は三つの部門に分けられる。第一は「字書之属」，第二は「訓詁之属」，第三は「韵書之属」がこれである。「字書之属」とは漢字の字形を解釈するもの，「訓詁之属」とは漢字の意味を解釈するもの，「韵書之属」とは漢字の字音，すなわち音韻に関するものであると理解されるが，対象が書記言語，漢字であり，その三要素――形・音・義に対応して，これはこれでまことに整然としており，且つ合理的な体裁をなしている。

言語それ自体（書記言語をも含めて）の探求を目差す言語学も，音韻論，文法論，意味論などの各部門を擁しており，さすれば，いわゆる意味論（semantics）の領野が，あたかも小学における訓詁の学に相当するがごとくである。しかし，この両者の間には，実際上の学問のあり方，対象の取扱い方について，極めて大きな相違があり，しかもその相違は見逃すことのできない研究結果上の問題を惹き起こすことになる。この小論は，両者の間に横たわるこの差異を自覚しつつ，中国の古典もことばによって表わされているからには，言語学的研究をその基礎に置かなければならないことを主張するなかで，一般にはあまり疑問視されることの少ない，いわゆる「反訓」の現象を俎上に載せ，その内実についていかなる理解が可能であるか，またいかなる問題点が存在するかを具体的に示してみようとするものである。

2. いうまでもなく，古来中国のことばは漢字によって表わされてきた。それゆえ，漢字の研究は古くから行なわれて来ており，「文字学」なる分野も存在するほどである。しかし，いわゆる文字学はおおむね字体についての研究であって，漢字の言語としての機能が十分に考察されているとは，とても言えない。ところが近年，言語学の枠組みの中で，文字の機能を明らかにしようとする学問が起こりつつあり，文字論（graphology）と命名されて，元来の文字学とは区別されるようになってきた[1]。文字論では，言語と文字との相関関係がまず問題にされることになるので，この分野の発展は，漢字の言語としての機能を明らかにするのに，大いに資するところがあると期待される。

これまで，字と語とが必ずしも明確に区別されないで，混同のままに論ぜられることがなかったであろうか。特に，中国語の場合，字と語とが一対一の対応を示すことが多いので，両者を混同するのみならず，甚しくは顛倒させて考える傾向すらあった。もともと，字と語とはその概念を異にするもので，字は語を視覚的に記号化したものであって，決してその逆ではあり得ない。このことは，少し反省を加えれば，誰にでもすぐ判る道理である。しかるに中国においては，文字が主で，語の要素をなす音韻は，文字の「読み」すなわち音声的符牒にすぎないとする考え方が一般に支配していることは否めない。このよう

な逆転した考え方をもとに戻し，文字を考察しようとする場合にも，その字のもとにある語の考察から出発しようとする立場は，極めて正当なものであると思う。

この認識によって，漢字は表意文字であるという俗説が糾正されることとなった。漢字が直接に意味を指示することはない。そうではなく，漢字は語を代表し，表わされた語を媒介として，意味に結びつけられるのである。この意味で，漢字は表語文字であると，正しく言い直されるべきである。このことを少しく敷衍するならば，いわゆる六書のうち，指事・象形・会意文字は直接意味を表わしているように見えるし，諧声文字は音を表わしているように見える。たしかに，例えば「日」という文字は起源的には，太陽の形を模していたに違いないが，それが一旦文字として定着し，社会習慣として実用に供される段階になると，必ずしもその表意機能を果しているとは言い難いのである。それはあくまで〔日〕という語を媒介としてしか「太陽」という観念と連合しないのである。ことは，この語を全く知らない人に文字のみで，指示対象を想起させることが一体どれほど可能かを考えてみれば簡単である。すなわち，「表意といひ表音といふもそれは専ら各字の起源に就いて言い得ることであって，表意なり表音なりの原理によって一旦特定の語と結びつくと，その文字は表意若しくは表音の媒介を藉りずに直接その語の sign となる」[2]といわれるのがこれである。

以上，語というものを基礎に据えて，文字を考察することの重要性を主張した。訓詁あるいは意味の学を考える場合，このことは決定的に重要な役割りを果すであろう。反訓といわれる現象も，文字の意味の奇怪な神秘性としてではなく，語のもつ意味の多様性と，語の使用法から喚起されるごく一般的な言語現象として理解し得ることが明らかにされるかも知れないのである。

3．古代中国語の中には，ひとつの語で相反する二つの意味を含むものがあるという。これが一般に反訓と称されるものである。ここでは，よく知られた「乱」という語を例として挙げておくことにする。まず，「乱」には［叛乱，紛乱，混乱］の意味があることは言うまでもない。たとえば，

"孔子成春秋而乱臣賊子懼"。孟子・滕文公下

"乱我心曲"。詩・秦風・小戎

などがこれである。これに対して,

"予有乱臣十人，同心同徳"。尚書・泰誓

"其能而乱四方"。尚書・顧命

"乱而敬"。尚書・皐陶謨

"茲予有乱政同位"。尚書・盤庚

"殷其弗或乱正四方"。尚書・微子

"武王曰，予有乱臣十人"。論語・泰伯

などの例は，もしこれを［治，治理］の意味にとらなければ，理解できないものである。このような解釈を採用するについては，古い字書からもその根拠が得られる。すなわち,

説文："乱，治也"。

爾雅："乱，治也"。

広雅："乱，理也"。

とあって，これを支持している。すなわち，「乱」ということばの一般的，常用的な意味は，もちろん［叛乱，混乱］であるが，特殊には，［治理］の意味で使用されることがあり，そうであるならば，この両者はまさしく反対概念をなすものである。では，この語は同一の語でありながら相互に反義関係を構成する一対の意味を含んでいるということになるのであろうか。この種の語が，本当に同一の形式を持つものであるならば，言語の使用者はどのようにして両者の意味のどちらかを決定できるのであろうか。かくて，いわゆる「反訓」という不可思議な現象は，避けることのできない問題を我々に与えることになるのである。逆に，この不可思議さが，歴代の学者に解釈上の困難を与え，「反訓」なる訓詁方法上の範疇を設けさせて，この種の現象をその枠組みの中で理解するというような安易な立場を選ばせて来たとも言い得るであろう。このことは諸学者の反訓についてのさまざまな定義の中にも窺えるが，その最も典型的なものを掲げれば,

"二義相反而一字之中兼具其義"(3)。

というものがある。

4. 反訓という現象が，一体なにに起因するのか，また，その本質はいかなるものなのかという問題については，これまでの学者の見解はさまざまであるように見える。ここでは，二三の代表的な解釈をとりあげて，ひととおりの検討を加えておくことにしたい。

（1）王念孫

“斂為欲而又為与，乞匄為求而又為与，貸為借而又為与，稟為受而又為与，義有相反而実相因者，皆此類也”(4)。

“凡一字両訓而反覆旁通者，若乱之為治，故之為今，擾之為安，臭之為香，不可悉数。爾雅云，鬱陶繇，喜也。又云，繇，憂也。則繇字即有憂喜二義，鬱陶亦猶是也。是故喜意未暢謂之鬱陶。檀弓正義引何氏隠義云，鬱陶，懐喜未暢意是也。憂思憤盈亦謂之鬱陶，孟子楚辞史記所云是也。暑気蘊隆亦謂之鬱陶，摯虞思遊賦云，戚溽暑之陶鬱兮，余安能乎留斯，夏侯湛大暑賦云，何太陽之晞曦，乃鬱陶以興熱是也。事雖不同，而同為鬱積之義，故命名亦同”(4)。

以上援用が長くなったが，ここでは王念孫は，原義派生義関係のひとつとして反訓現象をとらえているかに見える。一般にある意味を表わす語が，意味の面で派生を起こし，派生されて出来た意味をもつ別の語を形成することがよくある。また，もともとの意味をもつ語が，のちに他の意味に転用されて，その結果新しい意味用法が優勢を占め，もともとの意味が曖昧になってしまうことも起こりうる。しかし，真の意味で全く正反対の語義が同時に派生義として一つの語に共存するという状態は普通には想像しがたいものであると言わねばなるまい。もしそのようなことがあるとしても，それはたかだかある語の運用法のレベルにおいてであろう。この点，王念孫の考え方が，反訓を語の同形異義の事例として認識しているのかどうか，不明瞭であるように思う。同形異義というのは，たとえば，“会”が“会合”の会でもあり，”会不会“の”会“でもあるように，また，“抄”が“抄写”の“抄”でもあり，“抄家”の“抄”でもあるように，語源論的には関連性をもつことがあるとしても，共時的には二語と考えられるようなものを指す。王念孫が，このような明晰な意識をもっ

て，定義づけをしているようには思われないけれども，ひとつの原義を含む語が，派生が起きてのち，はじめて反義関係をもつようになると指摘していることは，注目されてよい。

（2）郝懿行

≪爾雅≫には，“徂，往也”という注解と，“徂，存也”という注解とがあって，互いに反訓関係を構成している。これに対して，郝懿行は次のように述べている。

“郭蓋未明仮借之義，誤拠上文徂往為訓，而云以徂為存，義取相反，斯為失矣。殊不思徂往之徂，本応作迋，徂存之徂，又応作且耳”[5]。

すなわち，文字の用法上から，元来は別語であるはずの二つの語が仮借によってたまたま同じ文字で表記されたにすぎないと考えたわけである。また，同じく≪爾雅≫の“愉，楽也”と“愉，労也”について，

“愉者蓋瘉之仮音”[5]

と述べ，さらに，

“二義相反，凡借声之字，不必借義”[6]

と説明している。［労］と訓ずる「愉」は実は「瘉」と同音で，それゆえ「愉」を借りて声としたと考える。このような見方を推演するならば，反訓といわれるものは，実は同音別語であると考えられ，極めて明解である。斉佩瑢は，このような考え方を支持して，いわゆる反訓というものは，もともとは仮借であって，意味には関与しないとし，反訓の存在そのものを否定するに至っている[6]。ただし，反義関係にある二語が何故に同音であるのかという疑問は未だ解決されていない。

（3）章炳麟

章炳麟の学問は，従来の文字の形の束縛を脱して，音声の通転関係から語義の通転関係を考証しようとするものであった。そして，それは「単語家族」(word family) を建てようとする今日的な傾向の先駆けをなすものである。音声の通転から発想されたその原理を，

“語言之始，誼相同者，多従一声而変，誼相近者，多従一声而変，誼相対相反者，亦多従一声而変”[7]。

と説明し，意味の相対相反するものも音声の通転によって，例えば，「天地，古今，始終，精粗，生死，加減」などは双声，「起止，寒煖，水火，旦晩，老幼」などは畳韻によっているとする。続けて，

“亦有位部皆同，訓詁相反者，始為基，終為期為極，……並以一語相変，既有殊文，故人無眩惑。其它亦有制字者而相承多用通耤。若特為牛父，引申訓独，而詩伝又訓為匹，則是読為等夷之等也。介為分画，引申宜訓両，而春秋伝以介特為単数，則是読為孑孓之孑也。苦徂故之為快存今，亦同斯例，特終古未制本字耳。若従雙声相転之例，雖謂苦耤為快，徂耤為存，故耤為今，可也”(7)。

と述べている。ここに説明されている原理に拠れば，およそ字義の相対相反するものは，いわゆる「一声之転」によったもので，双声によるものもあれば，畳韻によるものもあり，相転じたものは，二字をもって別々の語として表記される。ところが，相対相反関係にあるもののうち，たまたま二字で表わさなかった語が，一字で正反両面の意味を兼ね具えることとなり，一般にこれを反訓と呼びならわす，ということである。章炳麟の議論は彼の独自の語源論的発想にもとづいているので，大前提が正しいかどうか吟味を要する。特に一声之転，双声畳韻などの概念を用いることには疑問が多いが，中国語独特の語形成の原理を垣間見させてくれたことは一定の評価を与えるべきであろう。

以上，王念孫，郝懿行，章炳麟という代表的な学者の反訓に対する理解の仕方を推測概観することができた。これらの例から察するに，反訓ということばでひとまとめにされている現象も，実はかなり性格を異にする種々のものが内包されているのではないか。それ故になかなか一つの原理をもって説明しきることが困難なのではないかという感を深めるのである。言いかえれば，最初から反訓という訓詁解釈上の枠組みを設定しておいて，その中に本質の相違するものをすべて攙入してしまい，語義解釈に必要なときに，任意に反訓というレッテルを貼って済ませてしまうのはまずいのではないかということである。

5．反訓という観念自体は，古くは≪爾雅≫，≪説文≫などの字書に存在したのかも知れないが，≪爾雅≫，≪説文≫の作者が，それを明白に指摘したわけではない。反訓という現象を最初にはっきりと指摘したのは，東晋の郭璞で

あった。

≪晉書≫は，郭璞と，かの≪抱朴子≫の著者葛洪とを同じ列伝の中に入れている。しかも≪晉書≫の記述は，郭璞を占命卜卦をした人として，神秘的な預言者のごとくに描出している。かれの著作の中には陰陽，卜筮，風水に関するものも数多くあったらしいが，もちろん我々は，占卜の術者としてではなく，当時における第一級の詩人，学者として郭璞を重視するのである。特に，文献学者，又は言語学者としての仕事には，≪爾雅≫，≪方言≫の注解があり，この二つの注解は，古代中国語の語彙論と方言学にとってまことに重要な意義をもつものである。

個々の語の注解のほかに，特に注目されるのは，郭璞が語義解釈のためのいくつかの厳密な条例を確立し，またそのためにいくつかの有効な操作概念を提起したことである。たとえば，≪爾雅≫，≪方言≫には数多くの単音節語が登録されている。これら単音節語の意味は先秦時代あるいは揚雄の時代には，比較的単純で明晰なものであったかも知れないが，のちには次第に派生義を生じて，複雑化して来ていた。これらの派生の分化がいっそう進めば，二音節語となって，その涵義を明確化する傾向を生ずる。漢魏六朝へかけての言語のこのような傾向を敏感にとらえて，郭璞は多くの二音節の同義語を用いることによって，古語の単音節語を注釈するアイデアを出し，且つ実践で示したのである。

また，「語転」という概念を提起したこともその功績のひとつである。これは，ある語が表面的には異なる字で表記されていることがあっても，それらの字の音声から言えば，その由来はひとつであって，音声的に多少の差があるにすぎないというものである。たとえば≪爾雅≫に，

“卬，吾，台……，我也”

とあるが，これに，

“卬，猶姎也，語之転耳”

と注しているのがそれである。また，たとえば≪方言≫に，

“蠅，東斉謂之羊”

とあるが，これに，

“此亦転語耳。今江東人呼羊声如蠅。凡此之類，皆不宜別立名也”

と注している。すなわちこの二つは同源の語であって，それが地方によって音声上多少異なって発音されるにすぎない。このようなものを二つの漢字で表記するので，誤解を生むことになるのである。

このような例を見ると，郭璞は文字の束縛を受けず，音声上から語と語との関係を探求しようとし，また，自己の話し言葉の観察を通じて「語」の観念を獲得していたかに推測せられる。このような姿勢は，まことに≪方言≫の作者のそれを継承するものと言えよう。こうして，一歩進んだ目をもって言語を観察するなかで，郭璞はいわゆる「反訓」の概念を，おそらくは操作的な仮設物として提起したものであると思われる。文献解読技術上の操作概念としては，かれの提案は非常に有力な武器となり得たが，逆に，極めて複雑な言語現象もこの仮設物の中に取り込めておけば，それでこと足りるという態度に繋がるという危険性もある。この点，後世への影響も大きかったのではないだろうか。

以下で，≪爾雅注≫，≪方言注≫における反訓の事例を二三個別に検討してみたい。

6. 上述のように，反訓説は郭璞に始まる。≪爾雅・釈詁≫に，

“治，肆，古，故也”。

“肆，故，今也”。

とあって，後者の郭注に云う，

“肆既為故，又為今，今亦為故，故亦為今，此義相反而兼通者”

と。ここでは比較的明解な定義が下されている。ところで，≪方言≫巻二にも，

“逞，苦，了，快也。自山而東，或曰逞，楚曰苦，秦曰了”。

の注，

“苦為快者，猶以臭為香，乱為治，徂為存，此訓義之反覆用之是也”。

また，≪爾雅・釈詁≫，

“徂，在，存也”。

の郭注に，

“以徂為存，猶以乱為治，以曩為曏，以故為今，此皆詁訓義有反覆旁通，美

悪不嫌同名”。

と云う。前者の“反覆用之”という説明は比較的よく通ずるが，後者の“義有反覆旁通”の「旁通」はその意味があまりはっきりしない。おそらく，二つの相反する意味に通じて用いられるということかと推測する。

“美悪不嫌同名”とは，どういう意味なのであろうか。実はこのことばは≪公羊伝≫に見え，郭璞の上述の考え方が，多少なりとも≪公羊伝≫中のことばから影響を受けている節もあるので，ここで一応の検討を試みておこう。

春秋隠七：“滕公卒”。

公羊伝：“何以不名。微国也。微国則其称侯何。不嫌也。春秋貴賤不嫌同号，美悪不嫌同辞”。

これについての何休，徐彦，陳立の解釈は以下の如くである。

何休注：“滕侯卒，不名，下常称子，不嫌称侯為大国”。“貴賤不嫌者，通同号称也。若斉亦称侯，滕亦称侯，微者亦称人，貶亦称人，皆有起文，貴賤不嫌同号是也”。

徐彦疏：“滕侯卒，不名，下恆称子，起其微也。斉侯恆在宋公之上，起其大也”。

陳立義疏：“下常称子，桓二年滕子来朝是也。後此常称子，知実子爵，故不嫌為侯。此称侯者，自有別義”。“通義云，貴賤易辨，不相嫌者，則可以同号。若大国称侯，褒亦称侯，微者称人，貶者称人，各有起文，号同実異”。

すなわち，五等爵によって，大国は公，侯と称し，小国は伯，子，男と称するわけであるが，春秋の精神から，滕は小国ながら，滕君の卒するに及んでは，その功績を顕彰するために「侯」と称したというのである。それゆえ，春秋では「侯」という称号だけから，その爵位の貴賤を断定することはできないのであって，「侯」という称号に「貴」又は「賤」という相反する意味を含ませているわけではないのである。つまり，「侯」と称しているのは，ただ尊んで言っているにすぎないと理解されるべきなのである。また，

何休注：“若継体君亦称即位，継弑君亦称即位，皆有起文，美悪不嫌同辞是也”。

徐彦疏：“前君之薨，書地者，起其後即位者，是継体之君也。若前君薨，不

地者，起其後即位者，非是継体之君也”。

すなわち，「継体君」と「継弑君」とを春秋ではどのように区別しているかというに，ともに「即位」ということばを用いながらも，前君の死んだ地を誌すか誌さないかによって区別するという。ということは，「即位」ということばに「美」又は「悪」の相反する二つの意味が含まれていると主張しているのではないことになる。つまり，「即位」という語自体は，新君の君位継承を意味しているにすぎないと解されるべきである。

このようにして，≪公羊伝≫における“貴賤不嫌同号，美悪不嫌同辞”ということばは，郭璞の主張する“詁訓義有反覆旁通”とは，元来なんの関係もないことが判る。すなわち，郭璞は≪公羊伝≫の中のこの言葉を誤解して引用したのである。あるいは，そうでなければ，≪公羊伝≫中の語を意識的に断章取義したのかも知れない。ただし，誤解にしろ断章取義にしろ，郭璞の指摘によって，反訓の概念はここに確立せられ，訓詁技法上の操作概念として，後世常用されることになったのは事実である。

7. 郭璞が≪爾雅注≫，≪方言注≫で示した反訓の代表的な例をいくつか具体的に検討してみよう。

（1）“苦”

方言巻二：“逞，苦，了，快也。自山而東，或曰逞，楚曰苦，秦曰了”。

方言巻三：“逞，暁，恔，苦，快也”。

「苦」は一般にはもちろん［痛苦］の意味で用いる。しかし，ここの「快」の意味が［愉快］であるとすれば，「苦」は［痛苦］と［愉快］の両方の相反する意味を含むことになり，反訓を構成する。「快」には［快速］の意味もあるので，ここの「快」を［快速］であるととれば，反訓とはならず問題は起きない。しかし，列挙されている他の語をあわせて考えてみると，それは無理である。

この例は，むしろ≪方言≫という書物の体裁から考察を加えねばならない。≪方言≫は言語調査の報告という性格をもっている。揚雄は，国際音声記号を用いる替りに，当時の発音にもとづき，漢字を用いて各地の言語を記録したと

考えることができる。漢字を用いて諸言語を記録したことは，やむを得ないこととは言え，この資料の読み取り方の面で，種々の困難を惹き起こすであろうことは想像に難くない。特に注意すべきは，ある語の方言形式の発音をも，漢字で表記せざるを得なかったということである。

揚雄は，それぞれの語形式を次の五種に分類している。一，「通語」，全国に通用する共通形式。二，「某某之間通語」，某地域と某地域の間で通用する形式。三，「某地語」，特定の地域のみで通用する形式。四，「古今語」，残存する古語あるいは古代方言。五，「転語」，時代と地域の違いによって音声的に差異の生じた語[8]。

この体例から考えると，「苦」という語が，楚語中の単語であることは明らかである。しかし，また，これは「転語」に相当するものではなかろうかという疑問が起きる。そしてこの推測を支持する事実がないこともないのである。まず第一に，古籍上，「苦」を［愉快］の意味で用いた例が発見できないこと。次に，朱駿声は，

“苦快一声之転，取声不取義”[9]

と述べて，音声上の差にすぎないと考えている。音声的には，「苦」と「快」は韻母を異にするとは言え，ともに A.C. 渓母合口の字であり，楚地方の方言形式と考えてもさほど無理はないのである。もしこの憶測が正しいとすれば，「苦」は，共通語の「快」に対応する楚の方言形式であるということになって，これを反訓という概念から説明しようとするのは誤りであると思われる。

（2）“臭”　「臭」は相反する二つの意味があるという。ひとつは［香気］であり，ひとつは［悪気］である。香気と解される例は，

詩大雅生民：“胡臭亶時”。

悪気と解される例は，

左伝僖四：“一薫一蕕，十年尚猶有臭”

など枚挙すれば遑がない。

しかしこの語はもともと「におい」の総称であって，必ずしも香悪を限定したものではない。そのことを，段玉裁は，

“犬能行路蹤迹前犬之所至，於其気知之也。故其字从犬自，自者鼻也。引申

仮借為凡気息芳臭之称”[10]。

と述べている。現代の中国語では，「臭」xiù には，“気味”の意味と，“聞，用鼻子辨別気味”の意味があり，後者は「嗅」とも書かれる。また，「臭」chòu もあり，“気味不好聞的，跟‘香’相反”という意味である[11]。おそらく，もともとの「におい」の意味から，「引申」して［悪気］の意味をもつ別語となったものであろう。すなわち，［悪気］の意味の「臭」が，「反覆用之」して，［香気］となったわけでは決してないのである。原義が分岐して，［香］，［悪］二様の「におい」を意味するようになったとしても，それを直ちに反訓というわけにはいかない。むしろ語の多義性というに止めておくべきである。

（3）“徂” ≪説文≫に，“徂，往也”とあり，≪爾雅釈詁≫には，“徂，存也”とある。「往」は［前往］の意味であり，「存」は［存在］の意味であるが，［存在］はつまり［不往］であるから，郭璞はこれを反訓と認めたのである。“徂”については，すでに郝懿行の説を紹介した。但し，仮借ということを精確に解明するには，別に一稿を準備する必要がある。

（4）“曩”

爾雅釈詁：“曩”，久也。

爾雅釈言：“曩，曏也”。

説文：“曏，不久也”。

従って，「曩」は［久］でもあり，［不久］でもあり，それゆえ郭璞はこれを反訓としたのである。ところが，時間の久，不久はもともとはっきりした規準のないものである。実際のコンテクストの中に置いてみなければ，その意味は確定しがたい。日常の言語では，ある語に同じコンテクストで用いられるような二つ以上の意味が生じることがよくあって，これによって意味が衝突を起こす。同じ語の矛盾する意味の間の衝突は絶えず存在するもので，たとえば，common, certain などの語にはそのような傾向がある。中国語でも，“半天”や“一定”にはやはりそのような傾向がある。これは言語学的には，広く ambiguity の問題として捉えるべきだと考える。郝懿行は，

“対遠日言，則曩為不久，対今日言，則曩又為久”[8]

と述べ，邢昺も，

“在今而言既往，或曰曩，或曰曏”[12]

と述べているが，これらは，「曩」を反訓の例として考えるのは不適当なことを間接的に支持してくれる。先学のいわゆる反訓の中には，実は語の曖昧さという観点から見直されるべきものが多く存在する。

（5）“乱”

“乱”には相反する二つの意味があり，ひとつは，［叛乱，紛乱］であり，もうひとつは［治理］の意味であることはすでに述べた。これについて，「乱」は二つの異なる語形を有して，それぞれの意味に対応しており，しかもその語形の区別は，声調の違いにあるという興味深い説があるので，以下に紹介してみたいと思う[13]。「乱」を［治］の意味で用いるとき，それは平声に読まれ［混乱］の意味で用いるときには，仄声で読まれたのであろうという。なぜそのような推測が成り立つのかというと，現代の中国の方言から証明できるという。湖南の衡陽および江西の豊城一帯に行なわれる方言では，ばらばらの状態になっている糸や縄を一本に撚り合せることを，“乱一根索或縄”と言い，この場合の「乱」は陽平声である。ばらばらの糸や縄を“乱絲乱縄”と言い，この場合の「乱」は去声に発音される。楚辞の“乱曰”の“乱”には整理綜合する意味があるが，これは，分散した細長いものを一本にまとめる「乱」と意味が近似しているので，その読音は平声であった蓋然性がある。もしこの説が成立するならば，明らかに音形を異にする一対の別語であって，決して反訓には含まれないと言えるであろう。

8．以上，簡略ながら，郭璞の反訓と認めた例が，定義からみて，本当の反訓であるかどうか疑しいということを述べて来た。

もし，古語の研究に「語」という概念を導入し，語のかたちとその有する意味との関係を正しく認識し，さらには語を表わす文字との関係を正しく考察すれば，より深い理解が得られ，古典研究における実用的な字義解釈にとっても有用であると信ずる。語音と語義と字形は常に一対一に対応しているわけではなくて，言語の歴史的過程の中で一定の矛盾を含みつつ転変しているのである[14]。その主要な矛盾には，同形異音同義があり，同形同音異義があり，同形

異音異義があり，異形同音同義がある。このように複雑な言語現象を，もし，「声訓」だとか，「義訓」だとか，さらにはこれまで議論してきた「反訓」などという粗雑な観念の中に分類して，それが訓詁の方法であり，それでこと足れりとするならば，全く科学性に乏しいと言わねばならない。我々は意味論や文字論の立場をふまえて，言語史にたちむかうべきであると思う。言語史的事実に立脚しない古典研究は，おそらく危いものであろう。

注（1）田中春美等「言語学入門」文字論の項参照。（大修館書店）
（2）河野六郎「諧声文字論」（東京教育大学漢文学会会報，1953）
（3）劉師培「古書疑義挙例補」
（4）王念孫「広雅疏証」
（5）郝懿行「爾雅義疏」
（6）斉佩瑢「訓詁学概論」第三章参照
（7）章炳麟「小学答問」（章氏叢書）
（8）西田龍雄「漢字をめぐって」（月刊言語，1975．8．大修館書店）参照。≪方言≫についての短かいが示唆に富む記述がある。
（9）朱駿声「説文通訓定声」
(10) 段玉裁「説文解字注」
(11) 「新華字典」（北京，商務印書館，1971）
(12) 邢昺「爾雅疏」
(13) 龔達清「反義字的読音和釈義的問題」（“文史哲”叢刊第四輯≪漢語論叢≫ 1958）参照。
(14) 周祖謨「漢字与漢語的関係」（≪問学集≫中華書局，1966）参照。文字と語の関係についての要を得た概説がある。